

I 研究主題

基礎学力の向上をめざした学習指導の研究 ～小中一貫した学びの基礎基本の指導を通して～

II 主題設定の理由

1 社会の要請・教育の課題から

国際化、情報化、高齢化、少子化、価値観の多様化など、社会情勢や環境は大きく変化し、子どもたちを取り巻く今日の社会は急速な変化を遂げている。このような中で、我が国では学校週5日制が定着し、ゆとりの中で児童に「生きる力」を育むことをめざしている。そして近年、2つの国際調査「OECD 生徒の学習到達度調査」(PISA)と「国際数学・理科教育動向調査」(TIMSS)が実施された。その結果、我が国の子どもたちには読解力の低下や学習意欲・学習習慣が身に付いていないなどの課題が浮き彫りになった。これを受けて我が国の学校教育がその役割を果たすためには、今後どのようにして「生きる力」を育成していくか具体的な方策を工夫していくことが大きな課題となった。

本県においても「知」・「徳」・「体」のバランスのとれた児童生徒をめざすべく、「宮崎教育創造プラン」では義務教育9年間を見通した到達目標の設定を行い、小中学校はその達成をめざしている。特に「知」に関しては、児童生徒及び保護者も「基礎的・基本的な学力を身に付ける授業」、「読み書き計算など基礎的・基本的な学力を身に付ける授業」の関心が「宮崎の教育創造プラン策定のための県民意識ニーズ調査」(H14.2)で高いことが挙げられている。このように社会的にも県民の期待としても、特に学力低下への懸念から「知」に関する関心が高まり、基礎学力の向上が課題としてあげられ、その具現化が求められている。

2 地域の実態から

高原町は、県西の霧島山麓に位置し豊かな自然に恵まれ、神楽や棒踊りなど伝統文化がしっかりと受け継がれている地域である。町内には、小学校4校、中学校2校があり、高原中学校区と後川内中学校区の地域ごとに小中連携を図っている。小中連携では、「知」「徳」「体」の3部会に分かれ、小中学校職員合同による授業研究会、生徒指導部会等で連携を深めており、今後さらに連携を深め、学力を重点とし一貫した学習指導の工夫・改善を行いながら基礎学力の向上を図る必要がある。

前年度、本研究所では、「確かな学力を身に付ける学習指導の研究」を研究主題に、音読に重点をおき、読む能力を高める学習指導の工夫や音読集の作成・活用について研究した。課題として音読に関するさらなる指導の充実、各学校に生かすことのできる研究内容の設定が挙げられた。さらに、前年度末に町内教職員を対象にした学力向上に関するアンケートでは、学業指導や学習訓練等といった基礎的・基本的な指導についての回答が多く見られた。

そこで、本年度、本研究所では、小中学校で一貫して実践できる研究を進めていくことを前提に、基礎学力の核となる内容を明らかにし、その指導の工夫・改善を行うことで児童生徒の基礎学力を向上させることができると考え、本主題を設定した。

以下、本研究所では基礎学力の核となる内容を「学びの基礎基本」と定義付ける。

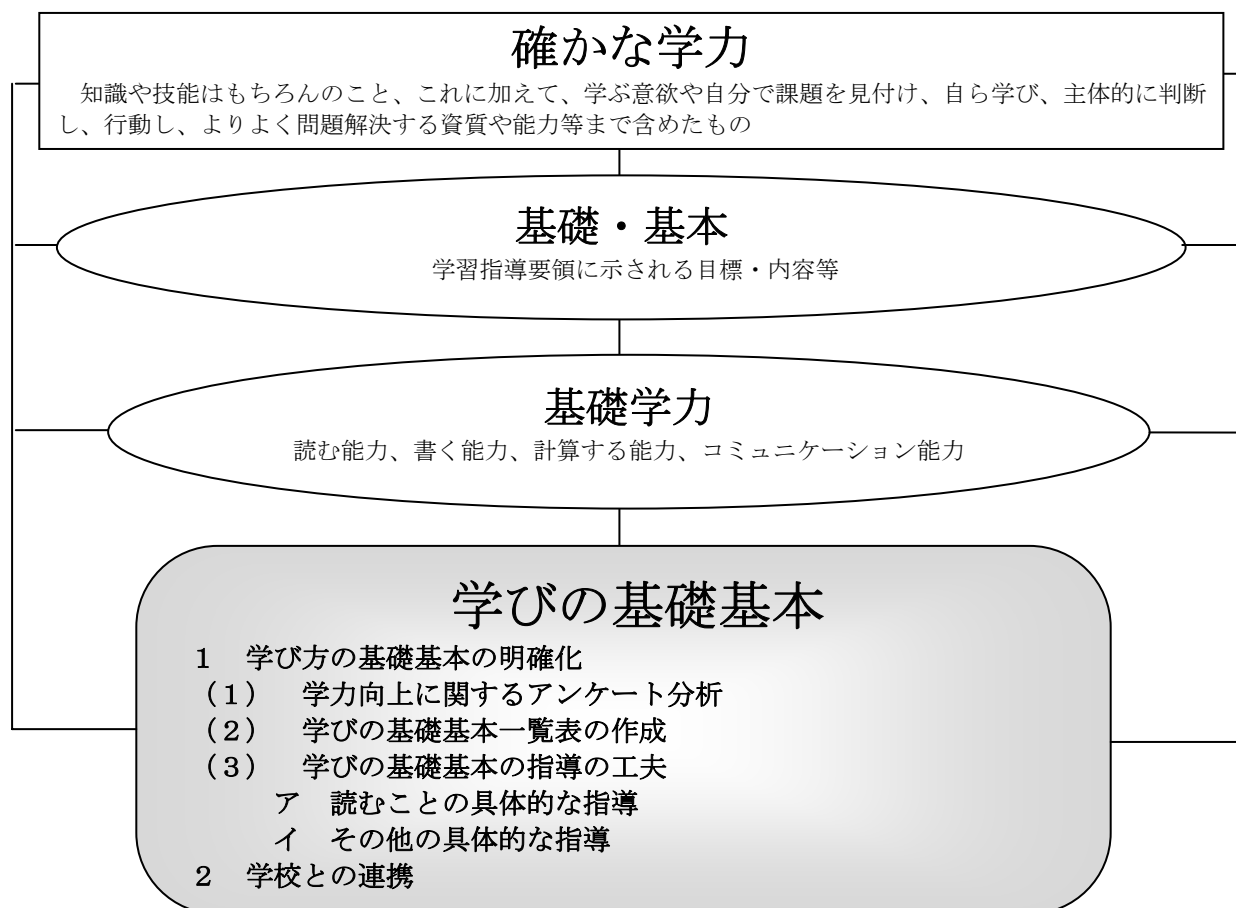
III 研究目標

- 高原町内の小中学校が一貫して身に付けさせたい学びの基礎基本を明確にし、その指導について共通実践・検証したことを広め、高原町内の児童生徒の基礎学力を向上させるための学習指導について究明する。

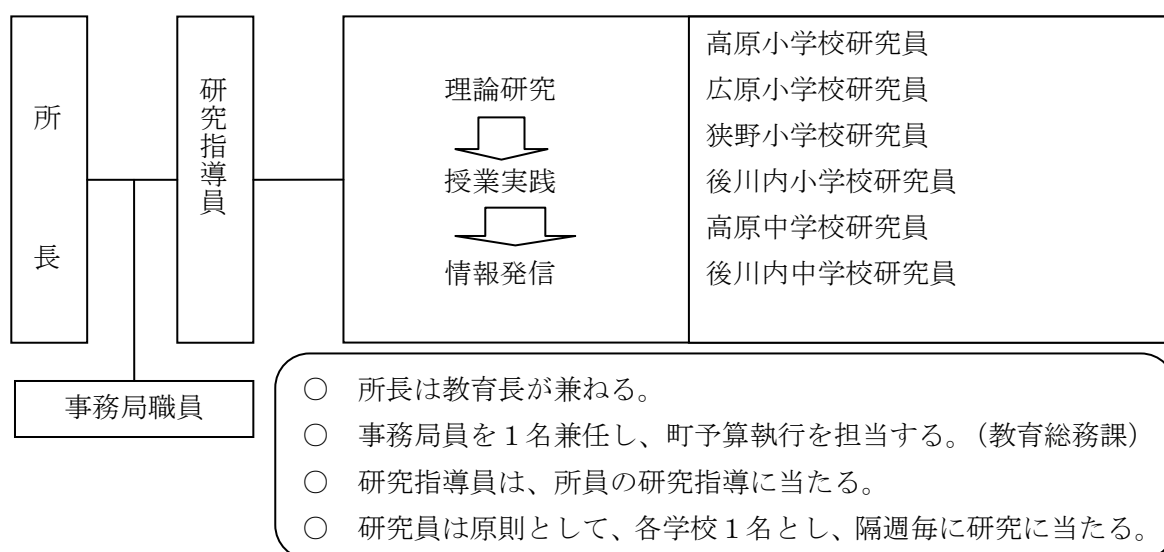
IV 研究仮説

- 高原町の小中学校の教育活動を通して、学びの基礎基本を明確にし、その指導について工夫改善を行い、成果の検証及び取組の状況を広めていけば、小中学校の学びの基礎基本の共通理解が深まり、児童生徒の基礎学力を向上させることができるであろう。

V 研究構想



VI 研究組織

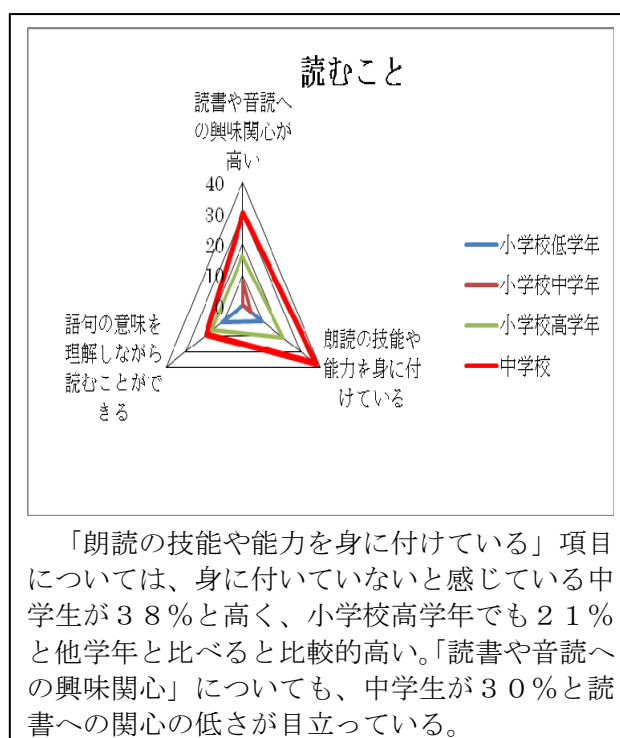
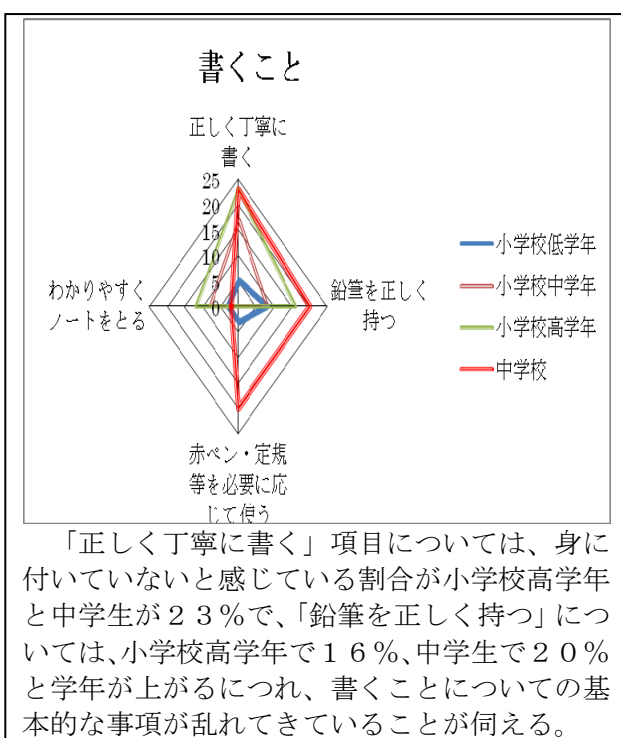
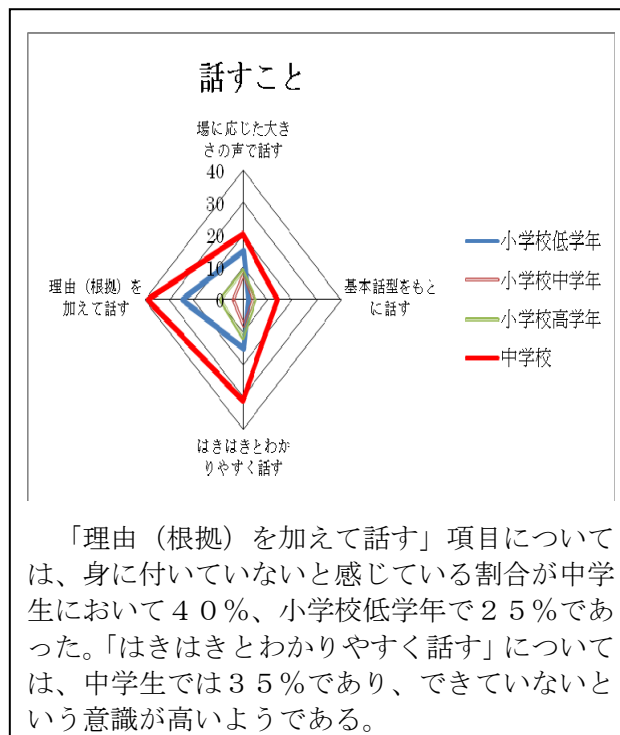
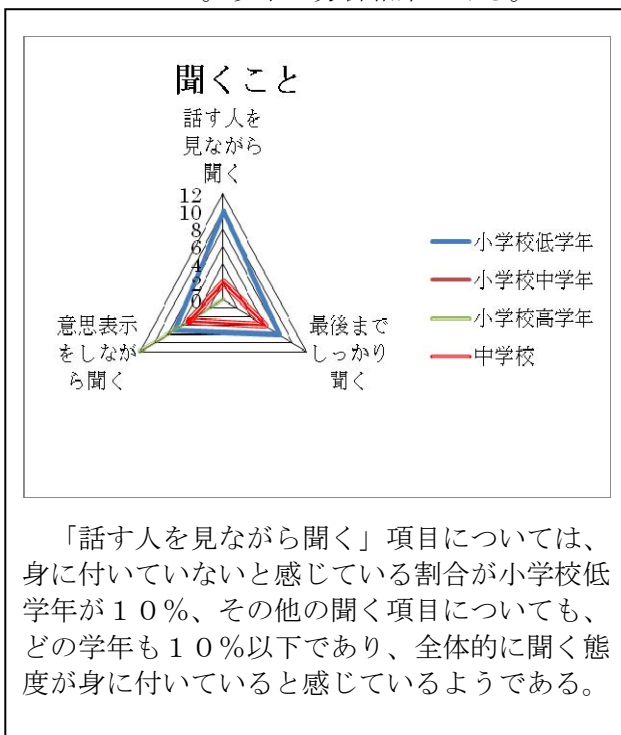


Ⅶ 研究内容

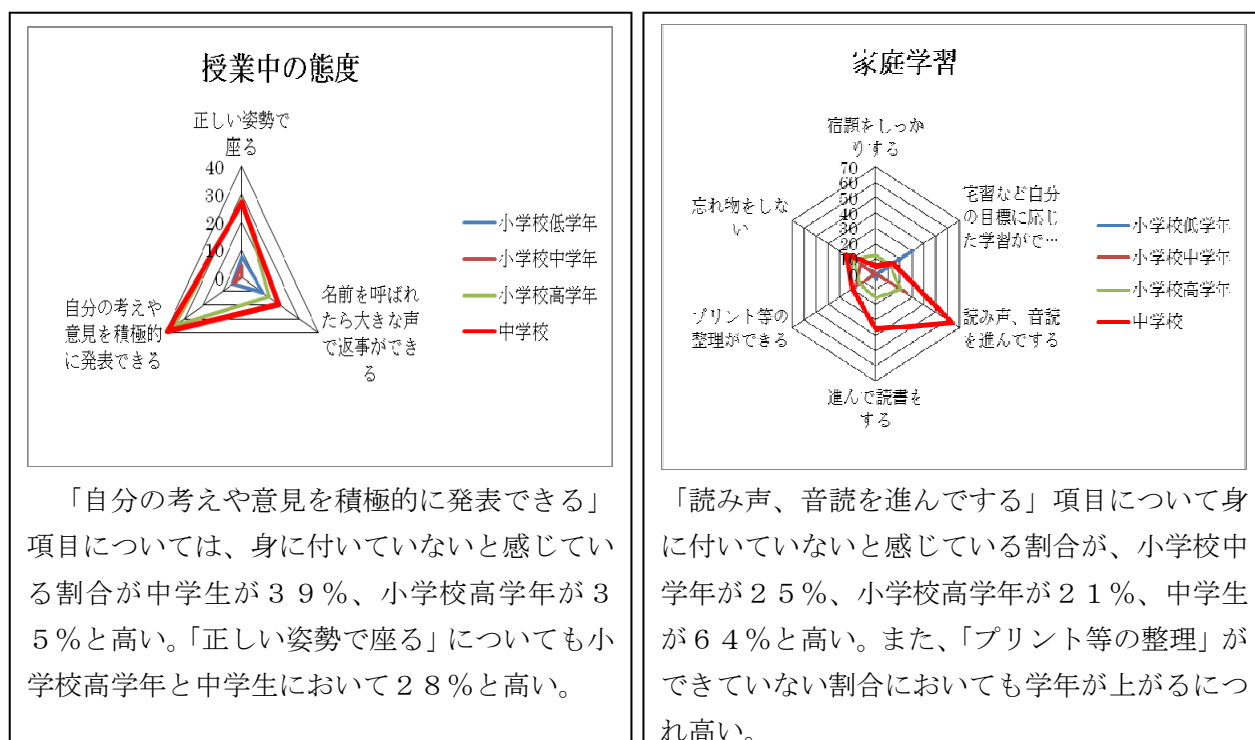
1 学び方の基礎基本の明確化

(1) 学力向上に関するアンケート分析

児童生徒の基本的な学習態度の実態を把握するために「話す・聞く・書く・読む」などの授業中の様子や「家庭学習」の実態などについて、町内の児童生徒及び教職員にアンケートを実施した。学習態度の基本的事項の中から特に身に付いていない項目をアンケートの結果から分析し、町内の児童生徒に必要な重点指導項目を挙げ、学力向上を目指すこととした。以下が分析結果である。



【基本的な学習態度のアンケート分析】



【基本的な学習態度のアンケート分析】

教師に対するアンケートの結果については、「理由（根拠）を加えて話す」「はきはきとわかりやすく話す」ができていないと感じている割合が特に高かった。しかし、児童生徒の実態から「机の中、ロッカーの中の整理整頓」など小学校の教師はできていないと感じている割合が高いが、中学校教師はできていると感じているなど、それぞれの項目について、大きく差が見られるものもあった。また身に付いていた基本的学習態度の定着は学年が上がるにつれ乱れてきている項目も多かった。

そこで、町内の児童生徒が特に身に付いていない項目において、児童生徒の発達段階に応じた具体的な指導の手立てが必要であると考えた。

（２） 学びの基礎基本一覧表の作成

基礎学力の向上に向けてまず大切なことは、学びの基礎基本を身に付けさせていくことである。その学びの基礎基本の内容の一つが、基本的な学習態度や生活習慣の定着である。その基盤がしっかりしていないと、効果的な基礎学力の向上につなげていけないのではないかと考える。そこで、アンケートで分析した結果を生かし、小中学校が一貫して共通実践できる「学びの基礎基本一覧表」を作成した。

町内で、重点的に指導が必要である項目に焦点を絞り、「話す・聞く・書く・読む」ことや「整理整頓や家庭学習」など授業中や授業外での基礎的な内容を挙げている。

「小学校下学年」「小学校上学年」「中学校」のそれぞれの学年で最低限度身に付けさせたいことを、読むこと、書くこと等の項目に合わせて具体的な指導内容を挙げ、段階的・系統的に指導が見通せるように作成した。

	学びの基礎基本
聞く	☐ 最後までしっかりと聞く。 ☐ 体ごと向く。
書く	☐ 板書をしっかりとる。 ☐ 共通ノートを活用。 ☐ 正しい筆順で丁寧に書く。 ・空書き ・色分け ・鉛筆体操 ・視写
読む	☐ 大きな声ではきはきと読む。 ☐ 口形指導。 ☐ 句読点に気をつけて読む。 ☐ 間違えずにすらすら読む。 ・平仮名片仮名を読む。 ・漢字を読む。

【小中一貫した学びの基礎基本一覧表】

(3) 学びの基礎基本についての指導の工夫

昨年度は、物語文や詩の指導において、「読む能力」を高めるために必要であると考えられる指導方法について研究を行い、一定の成果を上げることができた。それらを踏まえ、本年度は、特に「学びの基礎基本」の中の「読むこと」に重点を置き、指導の工夫を行うことにした。

ア 読むことの具体的な指導

小学校第1学年物語文「おとうとねずみ チロ」において音読の技能を高めること、そして中学校第1学年「ハチドリの不思議」においては、語句の意味を理解して読むことを目標に、指導の在り方とそれについての検証授業を行った。

(ア) 音読の技能を高めるための指導の工夫

a 授業の仮説と視点

仮 説	国語科の授業を通して、学びの基礎基本（読むこと：小学校下学年）を指導していけば、児童の学習への意欲が高まり、授業が効果的に展開し、児童一人ひとりの読む能力を高めることができるであろう。
視 点	音読の得意・苦手な児童を抽出し、その児童の音読への取組と自力解決との関連性を明らかにする。

b 検証授業の実際と考察

(a) 音読の工夫

音読の技能を高めるために、毎日の授業の中で音読の時間をしっかりと確保するようにした。まず、音読集を使って発音・発声練習を行った。学習する場面を読む際には、意味内容を明確にするため、句読点に印を付けて音読するようにした。

また、授業の後半において、登場人物の気持ちが表れるように音読する時間を設定した。読みの苦手な児童に対しては、教材文を拡大したものを使って音読させたり、読む箇所だけを見えるようにしたりするなどの手立てを講じた。

考察として、句読点に気を付けながら読むことで語や文のまとまり



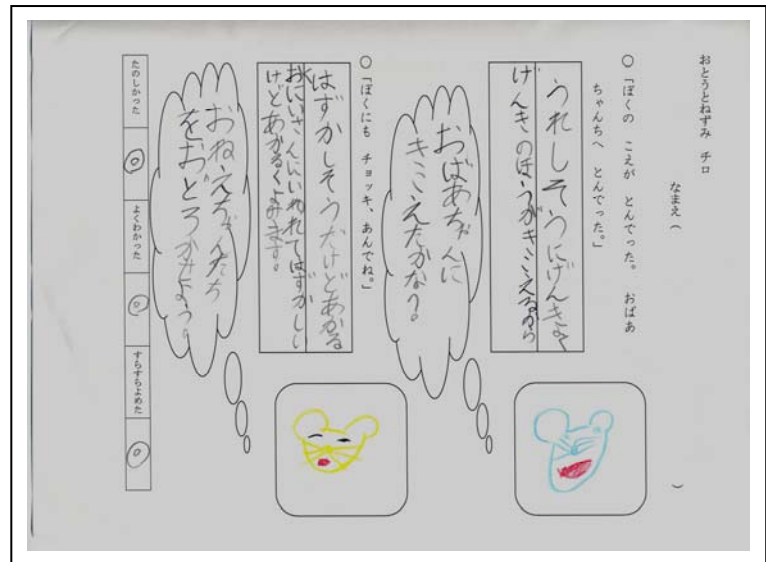
【拡大した教材文を使用しての音読】

りや内容を考えながら読むことができるようになり、楽しみながら教材文を読むことができるようになった。また、授業前半の音読では大きな声で読むだけであったが、後半の音読では登場人物の気持ちを考えながら読むことができていた。読みの苦手な児童も拡大した教材文を読む箇所だけ見えるようにしたり、指さし読みをしたりしたことで間違えずに音読することができ、意欲的に自力解決を図ろうとする姿が見られた。

(b) ワークシートの工夫

登場人物の気持ちを想像しやすくするために本文の横に、登場人物の心情を書き込むことができるワークシートを活用した。文章表現することが苦手な児童に対しては、登場人物の絵を描かせることで表現させた。

考察として、自分が読み取ったことを明確にし、叙述に即してより深く人物の様子や気持ちを想像しやすくなり、音読でも気持ちを込めて読むことができるようになった。また、文章表現が苦手な児童も絵を描くことで自分の考えをはっきりさせることができ、ワークシートに登場人物の心情を記入することもできていた。



【拡大した教材文を使用しての音読】

(イ) 語句の意味を理解して読むための指導の工夫

a 授業の仮説と視点

仮 説	国語科の授業を通して、学びの基礎基本（読むこと：中学校）を指導していけば、生徒の学習への意欲が高まり、授業が効果的に展開し、生徒一人ひとりの読む能力を高めることができるであろう。
視 点	語句の意味を理解している生徒・理解していない生徒を抽出し、その生徒の自力解決との関連性を明らかにする。

b 検証授業の実際と考察

(a) 辞書や語句集の活用

辞書的な語句の意味を理解させるために、中学校の授業では積極的に辞書を活用し、語句の意味を調べさせた。また、生徒にとって難解な語句が多いと思われる場合には、あらかじめ教師が語句を選んで、調べる語句を生徒で分担し、それらを合わせて語句集を作成した。語句は、一人一つは調べるように分担し、早く終わった生徒から次の語句を割り当て調べさせた。特に支援が必要と思われる生徒については、教師が共に辞書を引いたり、辞書を早く引き終わった生徒に支援に行かせたりした。また、内容理解のうえで特に重要だと思われる語句については全体で必ず確認し、その際、その語句が載っているページ数も全体で確認してから、意味を音読するようにした。



【語句集を活用する様子】

考察としては、辞書や語句集を使って語句の意味を確かめながら文章を読む生徒の姿も見られ、生徒は語句の辞書的な意味を正確に理解して読むことができたと考えられる。また、特に支援を要する生徒も、意味の分からない語句でも、辞書を引いて全体で意味を音読したり、語句集を使って効率的に語句の意味を確認したりすることで、語句の意味を理解することができた。

(b) ワークシートの工夫

ワークシートは、基本的な課題を始めの方に、発展的な課題を後ろの方に意図的に配列することで、生徒が基本的な内容を押さえた上で、発展的な内容を考えることができるよう工夫した。また、それぞれの課題ごとに、自分の力で解決できた課題には「○」を、教師や友達からのア

ハナドリクイズ ワークシート①
ハナドリクイズに答えよう！ (一)組

【目標】 語句の意味を正確に理解して、ハナドリクイズを解こう

一 ハナドリクイズ

クイズ3 クイズ2 クイズ1

① ハナドリが食べるのをやめたら、出されてゆきやと命を()なごめることができるのである。

ハナドリはとて小さい鳥であるがゆえに、作者から読者が逃げやすいが、とにかく食べつづけて食べたものをすぐに熱死させることで逃げた熱をどうにかおさなげ、四手原 近くは体温を保持して何かが生き延びているのである。

二 学習のまとめ

(1) 語句の 辞書的 な意味をもとに、その語句の前や後ろにある流れにあった「()」に適切な言葉を入れて読むことも必要である。

(2) 例えを使って表現することを「比喩表現」という。

「がかりやす」するための、読み手や読者の引きつけるため

三 自己評価 (4が最もよい)

① クイズに基本的な語句の知識が... ④ ③ ② ①

② 語句の意味を理解できたか... ④ ③ ② ①

【授業で活用したワークシート】

ドバイスを受けて解決できた課題には「○」を、教師が解答を提示し説明をして理解した課題については「△」の記号で記入させ、生徒の理解の様子を教師が把握し、評価に生かせるように工夫した。そして、本時で何を学習したかを生徒が振り返ることができるように、ワークシートの最後に、「学習のまとめ」と自己評価の欄を設けた。特別な支援が必要だと思われる生徒については、ワークシートの配列通り、基本的な課題から取り組ませ、教師や理解の進んでいる生徒が個別にアドバイスすることで、自力解決を図り、学習内容について理解させるように工夫した。

考察としては、生徒はワークシートの流れに沿って、基本的な課題から発展的な課題へと取り組むことにより、課題を解きながら徐々に思考のレベルアップを図ることができたと考えられる。また、最後に「学習のまとめ」を記入したことにより、学習したことを振り返らせることができた。特別な支援が必要と思われる生徒については、基本的な課題の評価の項目に「○」がついていたことから、他の生徒からのアドバイスをもらうことで学習内容を理解したことが分かった。また、二つの課題を見比べながら、学習した内容を生かして発展的な課題を解決する姿勢が見られた。

(c) 学習形態の工夫

文脈上の語句の意味を考えてワークシートに書く活動の時に、生徒の理解度や課題の難易度に応じた様々な学習形態を取り入れた。一人でじっくり考える時間や、ペア等で教え合ったり、6人程度のグループで話し合って意見を一つにまとめたりする時間を設定した。

考察としては、理解が早い生徒の支援を受けて理解することができた生徒や、他の生徒の意見を聞くことで語句の文脈上の意味を把握できた生徒もいた。また、友達に教えることで自分



【ペアで教え合う様子】

の理解を深め、自分の意見に自信を持つことができた生徒もいた。特別な支援が必要と思われる生徒については、友達に教えてもらったり、他の人の意見を聞いたりすることで、理解が難しいと思われる語句の意味についても理解できていた。

(ウ) 読む能力を高める音読集活用の工夫

昨年度本研究所で作成し、町内の全児童生徒と教職員に配付した音読集「高千穂峰」の活用が十分とはいえないため、本年度はさらに具体的に実践できる場面を考え共通実践した。

a 活用の場面と実践

(a) 教科書教材と関連させた活用

国語科では、教科書教材の指導に入る前に本時のねらいに近いものを音読集から取り上げて指導することにより、音読を正しくリズムカルにし、意欲を高める効果があった。また、内容読解の段階においても音読集の活用による語句の正しい理解や語彙の定着によって、より深い読み取りにつながっていった。

社会科では、教科書で扱われる人物・作品についての具体例や発展として、音読集を読ませることによってより印象深い学習になった。

(b) 朝の会、帰りの会

教師が今日の一文として紹介・解説をし、司会者に続き全員で復唱した。

(c) 集会

音読集に掲載された名文を集会の場で各学年や学級ごとに一斉読み、分担任読み、群読などに取り組みさせた。他の学級や学年の児童生徒からも学ぶことができ、読む力や発表力の向上ばかりでなく、意欲的に取り組もうとする態度につながった

(d) 朝自習

声を出して繰り返し反復練習することによって漢字の読みの定着化や音読の習熟が図られた。また、音読するだけでなく、音読集を視写したり、文章中の漢字を書くことによって書く力の鍛錬にも対応できた。

(e) 文化的な行事など（朗読、群読など）

学級・学年や児童生徒全員で同じ文章を読むことによって、一体感を強め、さまざまな活動の意欲付けにつながった。また、全体の中で発表する機会を与えることによって、児童生徒に自信をもたせ表現する力の向上にもつながった。

(f) 家庭学習

音読集を家庭学習において読み声・読み物としても活用することにより、教師・保護者・児童生徒が一体となった取組を行うことができた。このことは、読む力ばかりでなく、学力向上を図る上で家庭学習の環境を整えることができた。

イ その他の具体的な指導

学びの基礎基本の中から、話すこと、聞くこと、書くこと、姿勢、整理整頓について、具体的な指導の工夫を行った。

(ア) 話すことの指導

「理由（根拠）を加えて話す」「場に応じた大きさの声で話す」等の項目の指導として、発表の仕方を示した話形表や声の大き



【発音発声の様子】

さの目安となる声のもののさし表を掲示した。また、朝の時間等に発音発声練習の時間を取り入れた。

これにより、発表の仕方が身に付き、場に応じた声の大きさを意識しながら話すようになった。

(イ) 聞くことの指導

「自分の考えと比較しながら聞く」等の項目の指導として、発表時の注意点の中に、発表する側だけでなく、「きちんと反応。みんなで意思表示。」といった、発表を聞く側の態度も示した。

これにより、友達の見解をしっかりと聞く態度が身に付いた。また、発表する側も友達を意識して自分の意見をはっきりと述べるようになった。

(ウ) 書くことの指導

「正しい筆順で丁寧に書く」「板書を見ながら分かりやすくノートをとる」等の項目の指導として、文字を書く前に鉛筆体操をさせたり、筆順を色分けして新出漢字の指導をしたりした。また、学習で使用するノートは共通のものにし、ノートの使い方も指導した。

これにより、文字の筆順に注意して正しく書こうとする態度が見られるようになった。また、ノートの使い方を指導することで、学習の流れがつかみやすくなり、全体で復習する時にも役立った。

(エ) 姿勢指導

「よい姿勢で座る」の項目の指導として、足、背中、手の位置等を意識して正しい姿勢で座れるよう、合言葉を作ったり、掲示物を活用したりした。授業開始時や終了時に合言葉を唱えながら正しい姿勢を意識させると、より効果的だった。

これにより、姿勢への意識が高まり、書く時の姿勢や本を読む時の姿勢などがよくなってきた。

(オ) 整理整頓の指導

「机の中など身の回りの整理整頓をする」等の項目の指導として、朝の会や帰りの会で一分間整理の時間を設けたり、掲示物を活用し机の中の使い方の指導をしたりした。また、授業中の机上の使い方（教科書、筆記用具等の位置）についても指導した。

これにより、整理整頓の意識が高まり、授業中の作業も円滑に行えるようになった。

2 学校との連携

本研究所で行われている研究を町内の先生方に広く知ってもらうために、「高原町教育研究所通信」を発行した。通信には、研究内容や研究授業の案内、音読集の特色や利用方法等を掲載した。また、研究の成果を理解していただき、共通実践が図りやすくなるために「高原町教職員研修大会（3月）」での発表を設定している。



【鉛筆体操の掲示物】



【正しい姿勢の掲示物】

VII 成果（○）と課題（●）

- 学びの基礎基本一覧表の作成を通して、その具体的な指導について実践したことで、効果的に授業を展開できるようになり、基礎学力の向上に資することができた。
- 音読の技能を高める指導の工夫及び語句の意味を理解して読むための指導の工夫をしたことで、児童生徒は進んで音読に親しみ、教材文を正確に読み取ることができるようになってきた。さらに、学びの基礎基本（読むこと）の具体的な指導の工夫を図ることができた。
- 検証授業の公開や研究所通信の発行により、学びの基礎基本の定着を図る基盤ができつつある。
- 学びの基礎基本の具体的実践を深め、長期的な視点から基礎学力の変容を把握し、学びの基礎基本と基礎学力の関係を明らかにしていく必要がある。
- 学びの基礎基本のうちの読むこと以外の観点である話すこと・聞くこと等についての研究を進め、学びの基礎基本についてより検証を深めていく必要がある。
- 学びの基礎基本で実践したことを、町内の学校に推進していく必要がある。

【参考文献】

小学校学習指導要領	文部科学省
中学校学習指導要領	文部科学省
小学校学習指導要領 解説 国語編	文部科学省
中学校学習指導要領 解説 国語編	文部科学省
学校教育を中心とした宮崎の教育創造プラン	宮崎県教育委員会

【研究同人】

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名
教育委員会	所長	家高 清	高原小学校	教諭	吐師 裕子
教育総務課	研究指導員	深城 義治	広原小学校	教諭	長倉 妙子
教育総務課	課長	久保田芳人	狭野小学校	教諭	武田 透
教育総務課	課長補佐	齊藤 和男	後川内小学校	教諭	岩元 君代
教育総務課	係長	田上 則昭	高原中学校	教諭	武田 和子
			後川内中学校	教諭	村尻 久志